

かえつ有明高校(東京)3年生

私の視点

おけたに 里緒
桶谷 里緒こばやし ひな
小林 妃奈

学校から聞こえてくるのは、子どもの笑い声ではなく、銃声――。

私たちは2年前、模擬国連という世界情勢を学ぶ課外活動で「シリア情勢」を調べ、写真や記事で世界で学校が軍事利用されている現実を初めて知り、強い怒りを覚えました。

現在、世界の29カ国で、学校が兵舎や軍基地、拷問室として占領されたり、学校が意図的に破壊されたりしています。のべ2700万人の子どもが学校に通えていません。生徒や教師が拉致され、殺され、徴兵される被害が報告されています。

私たちにとって、学校はいつでも安全で、安心できる場所であることが当たり前です。こうした環境が保障されて、先生や友だちに出会い、本気になって学び、学校を第二の家のような存在に感じていたのだと、改めて気づかされました。だからこそ、他国の学校の現状に強い衝撃を受け、同じ生徒として助けてあげたい、という使命感を覚えました。

いま、私たちは「学校保護宣言キャンペーン」を進めています。長崎県や沖縄県の高校生たちとも連携して、日本政府に「学校保護宣言」に6月までに調印してもらうことを目標にしています。

宣言は学校の軍事利用を原則禁止し、たとえ国が紛争中でも、子どもたちに安全で安心な教育環境を保障する内容で、2015年にノルウェーとアルゼンチン両政府主導のもと

子どもの笑い声戻して

学校の軍事利用

策定されました。すでに74カ国が調印し、その中にはアフガニスタンやイエメン、南スーダンなどの紛争中の国も入っています。アフガニスタンでは教育省が軍隊に働きかけ、学校から撤退させたそうです。しかし、日本はまだ調印していません。私たちは微力だけど、無力ではないはず。そんな思いから始まった活動の一つは、メッセージ付きの付箋に署名してもらい、巨大なこのぼりにして日本政府に手渡すものです。2千人をめざしています。

お願いする際にはこの問題を丁寧に説明し、納得してもらうことをモットーにしています。署名活動で説明が足りず、無理なお願いなのは、との指摘もありました。反省を踏まえ、わかりやすく説明できるように、資料もつくりました。

日本が調印しても、すぐに学校の軍事利用が止まるわけではないと思います。でも、一つ一つの小さなアクションが集まれば、日本政府を動かす力になり、世界を変える大きな力になるはずです。そして、再び学校に子どもの笑い声が戻ってほしい。自分たちの行動はその第一歩にすぎませんが、この活動で得た自信と、志を一つにした仲間を大切に、この先もそれぞれの分野でアクションを起こしていきたいと思っています。

◆投稿は手紙が siten@asahi.com へ。電子メディアにも掲載します。